

百工比照：大名の工芸標本集

百工比照は、17 世紀に日本各地の工芸品を表す小物や見本、図版を集めたものである。加賀藩（現石川県、富山県）5 代藩主・前田綱紀（1643-1724）の発案によるものである。1600 年代の優れた工芸技術を示す 11 箱、計 2,000 点余りを収蔵している。

収集家

前田綱紀は几帳面な学者で、書物や文献、工芸品などの収集に努めた。同時代の多くの人と同様、綱紀は中国の新儒学者・朱熹（1130-1200）の「格物致知」という思想に強く影響を受けていた。この思想に基づき、綱紀は装飾工芸（人間の創造性に由来する「知」）をよく観察することで、物理的な世界を構成する基本的なパターンを見出すことができると信じていた。この思想を工芸品に応用したのは綱紀にとって珍しく、「百工比照」は他に類を見ない貴重な資料となった。

このコレクションは、綱紀が職人に見本を作らせたものである。また、加賀や江戸（現在の東京）の前田家の邸宅から収集したものもある。また、他藩のものを購入し、売却を拒否された場合は、複製や挿絵を描いてもらったりもした。コレクションの約 85～90%は綱紀が集めたもので、綱紀の死後も子孫によって拡充された。しかし、第 11 号箱は一時的な「仕分け箱」であったと思われ、整理されていないことから、完全な目録作成には至らなかったと考えられる。

内容

蒔絵、金工、木工、和紙、皮革、布の見本や、衣服、家紋などの図を収録している。

第 1 号箱には、蒔絵の見本などが収められている。特に注目すべきは、初期の蒔絵様式のひとつである梨子地塗色類の升目である。梨地とは、不規則な大きさの粒子からなる「梨地」と呼ばれる細かい金粉を使用する。漆塗りの下地に粉を蒔くことで、梨の皮のような質感を表現するものである。梨地蒔絵の升目は、塗り方と色調の変遷を示すように配置されている。このように、蒔絵のデザインやスタイルの参考になるとともに、職人の教材としても役立ったのであろう。

第 2 号箱には、風雨を防ぐために鎧の上に羽織る陣羽織など、色鮮やかな武具の図版が多数収められている。綱紀は陣羽織そのものを収集しなかったのだろうが、陣羽織は武士の身分の象徴でもあり、入手は不可能であった。そこで綱紀は、陣羽織を丁寧に紙に描かせ、その図版を百工比照のコレクションに収めたのである。

箱の中には、見本ではなく、実際に使用されたものが多く含まれている。第 3・4 号箱は金具、第 5・6 号箱は装飾用の釘隠し、第 7 号箱は複雑なデザインの引き出しの取っ手が入っている。残りの箱には、装飾用のフィニアル、木や革のサンプル、引き出しの取っ手や釘隠しの図面、設計図、ま

た、まだきちんと整理・保管されていないものなどが入っている。

特に、第 6 号箱の金とエナメル釘隠しは見事である。鳥や昆虫を入れた鳥かごをイメージしたものや、鳥かごから花が咲いているようなデザインのものもある。この釘隠しは、百工比照に収蔵される以前は、江戸の前田家の邸宅にあった室内装飾品である。